常葉大学外国語学部紀要〈特集論文〉
第37号　2021.3.　3頁～　18頁

木宮泰彦『日華文化交流史』の学術的意義

The Academic Contribution of KIMIYA Yasuhiko, *The History of Japan-Sino Cultural Exchange*

若松大祐
WAKAMATSU Daisuke

（令和二年十一月六日受理）

抄　録

木宮泰彦『日華文化交流史』（一九五五）は、日本の学術においてどのような意義を持つのか。本稿の目的は、三つの意義を提示するところにある。本稿は、前半で『日華文化交流史』の内容を概観し、それを踏まえ後半で意義について考察する。三つの意義とは、第一に日中関係史研究におけるものであり、第二に中国現代史研究もしくは日中戦争研究におけるものである。第一と第二の意義については先行研究が多いため、第三に日本近代教育史研究におけるものである。第三の意義が新たな研究を展開するための可能性を持とう。

キーワード：日支交通史、常葉、日中関係史、対外関係史、仏教

はじめに
一、各篇各章の概要
二、日本の学術界における意義
おわりに

はじめに

木宮泰彦（一八八七–一九六九）の『日華文化交流史』（東京：冨山房、一九五五年。以下、時に本書と略す）は、日本の学術においてどのような意義を持つのか。本稿の目的は、三つの意義を提示するところにある。本稿は、前半で『日華文化交流史』の内容を概観し、それを踏まえて、後半で本書の持つ三つの意義を提示する。三つの意義とは、第一に日中関係史研究におけるものであり、第二に中国現代史研究もしくは日中戦争研究におけるものであり、第三に日本近代教育史研究におけるものである。第一と第二の意義については先行研究が多いため、第三の意義が新たな研究を展開するための可能性を持とう。

一、各篇各章の概要

これから『日華文化交流史』の各篇各章の概要を書くにあたり、それに先んじて本書の構成を記す。本書は九〇〇頁を越え、文字通りの大著である。順に図版が二五頁、序文が四頁、目次が一二頁、本文が七二〇頁、日華通交年表が一〇三頁、索引が四五頁をそれぞれ占め、巻末には折り込み地図が一枚付く。

本文は全五篇からなるも、各篇の分量は均等ではない。それぞれ第一篇「漢・六朝篇」（全四章、全五七頁）、第二篇「隋・唐篇」（全五章、全一七九頁）、第三篇「五代北宋篇」（全二章、全八一頁）、第四篇「南宋・元篇」（全五章、全一〇一頁）、第五篇「明・清篇」（全六章、全一九九頁）といったふうである。また、各章の分量もまちまちである。

なお、本書の特徴として、本文に僧侶や船舶の一覧表が多量に挿入されており、読者の理解を助ける。これとは反対に、中国古典文の引用が原文（時に返り点あり）のままであり、現代語訳が付いていないため、現代の読者にとっては不親切に感じるだろう[1]。

（〇）序文

序文において木宮は、「我が国は（…中略…）新文化を摂取し、これを咀嚼し、醇化することによって、わが固有の文化を培い、特異優秀な国風文化を創造してきた」（一頁）と述べ、これは本書の一貫した立場となる。

序文は、本書『日華文化交流史』が旧著『日支交通史』を増補改訂して出来上がったという経緯を説く。エピソードは大きく五つに分かれ、すなわち、日中両国で旧著が好評を博したために著者として増補改訂版を作る決意をしたこと、文部省の精神科学研

[1] 中国歴代正史における日本関係の記録を日本語へ訳出したものには、次の書籍がある。石原道博（編訳）『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』（中国正史日本伝1、新訂版、岩波文庫）（東京：岩波書店、一九八五年）。石原道博（編訳）『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』（中国正史日本伝2、新訂版、岩波文庫）（東京：岩波書店、一九八六年）。

究奨励金[2]を得て日本各地で資料調査を行ったこと、一九四〇（昭和一五）年の中国出張（現在でいうところのフィールドワーク）で江南を遊歴したこと、増補改訂版の原稿が印刷直前に東京大空襲に遭って灰になったこと、そしてさらに一〇年の歳月を経て増補改訂版を作り直して上梓したことに及ぶ[3]。木宮には、日中交流から日本史を理解するという学術的な動機とともに、日中交流の歴史研究に基づき、東アジアの平和の構築に寄与したいという現実的な動機もあった（四頁）。

（一）第一篇「漢・六朝篇」（全四章、一–五六頁）

第一篇は原始時代から六朝までを範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「原始時代に於ける中国文化の波及」（三–一三頁）、
第二章「倭国と漢魏との通交」（一四–二三頁）、
第三章「日本と中国南朝との交渉」（二四–四六頁）、
第四章「上古の帰化漢人と文化の流入」（四七–五六頁）

である。

本篇は、原始時代から六朝までを扱う。この時代の交流は、自然発生的な特徴を持つ。中国や日本という国家同士の交流ではなかった。というのも、当時は日本にまだ日本規模の統一的な統治機構が成立していないからである。

第一篇第一章では、中国から朝鮮半島を経由して日本へ至る経路、特に朝鮮半島から日本への交通路の特定を行う。太古の時代の日中交流は朝鮮半島を経由した。朝鮮と日本との間には海があり、二つの交通路が存在したという。

まず、原始時代から存在した交通路は、日本海回流と呼びうるものである。日本海を左旋して流れる回流に沿って、朝鮮半島の辰韓から日本の山陰、そして北陸に連なる（三頁）。海流の関係があり、日本へは行きやすいものの、逆に辰韓へは行けない。片道の自然航路である（四頁）。

次に、時代が下ると海北道中という交通路が出現する。辰韓や弁韓から対馬を経て筑前に至る。対馬海流を横断して往復するものであるから、航海術の発達を待たなければならなかった（一〇頁）。

第一篇第二章では、中国北方（後漢や魏）と日本（奴国や邪馬台国）の交流を考察する。中国文化が朝鮮半島経由で伝わり、それが日本を刺激し国家統一の機運を創り出したという（二二頁）。中国文化との接触は、大和朝廷の成立の外的要因になったのである。

第一篇第三章では、中国南方（南朝）と日本の交流を考察する。朝鮮半島での混乱から高句麗、百済、新羅の三国が鼎立し、朝鮮半島を陸路で経由しにくくなると、新たな航路が出現する。九州から百済を経由し、さらに黄海を航り山東から江蘇へ至る南道である（四一頁）。南朝との交流は、日本をして「中国の礼文政治を参酌して宮廷の衣冠を飾り、紛乱した族制政治に秩序つけよう

[2] 精神科学研究奨励金については、次のサイトで少しだけ言及されている。「文部科学省トップ＞白書・統計・出版物＞白書＞学制百二十年史＞第一節　学術行政」(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318252.htm)〔2019/10/18 確認〕。

[3] 文末の参考資料に記載の漫画「木宮泰彦の奮闘」などを参照されたい。木宮泰彦や『日華文化交流史』について、漫画や年表や図表を使い解説している。

と」せしめた（四六頁）。後の聖徳太子の冠位十二階の制定や十七条憲法の発布を準備したのであるから、日本にとって江南（南朝）との交流は、かつての華北（中国地方）との交流よりも文化的な影響が大きい（二四、四六頁）。

総じて、本篇は日華文化交流というよりも、日韓華文化交流というべきであろう[4]。とはいえ、本書は全体を通じて朝鮮を経路とする交流にはほとんど言及がない。日中交流は双方向的であれども、文化程度が東へ行くほど低くなるから、中国が一方的に日本へ物心両面で影響を与えた。

（二）第二篇「隋・唐篇」（全五章、五七―二三五頁）

第二篇は隋と唐を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「遣隋使」（五九―七三頁）、
第二章「遣唐使」（七四―一二一頁）、
第三章「遣唐使廃絶後の日唐交通」（一二二―一三六頁）、
第四章「遣唐学生・学問僧と文化の受容」（一三七―二一四頁）、
第五章「帰化唐人・印度人・西域人と文化の移植」（二一五―二三五頁）

である。

本篇は、遣隋使の始まりから遣唐使の終わり、さらには唐の滅亡（西暦九〇七年）までを扱う。原始時代から六朝まで（つまり第一篇の考察範囲）とは異なり、隋唐の時代になると日中双方は国家間での正式な交流を始めたのである。

第二篇第一章では、遣隋使について考察する。遣隋使は、日中双方にとって初の正式な国家間交流である。従来、日本が中国文化を受け入れるのは、朝鮮半島を経由してであった。今や日本は中国へ積極的に出向き、中国文化を直接摂取するようになる（五九―六〇頁）。中国文化とは、「仏教のみならず、汎く大陸文化」の全般であった（六三―六四頁）。遣隋留学生の留学は二十―三十年にわたり、これはちょうど隋末から唐初は唐王朝の「宮廷の儀礼や政府の組織や、諸般の法制が次第に整ひつつあつた時であつた」（七一頁）。中国文化を吸収した留学生が帰国すると、日本では族制政治から礼文政治への転換を求める機運が加速する。その結果として、冠位十二階の制定や十七条憲法の発布がある（七二頁）。

第二篇第二章では、遣唐使について考察する。優秀な中国文化をさらに摂取し模倣するために、遣隋使に続き遣唐使が六三〇年から八九四年まで派遣された。公式には一九回あったというものの、実際は一三回である（七四頁）。つまり、平均二〇年に一回の派遣があったことになる（一五七頁）。木宮はこれを四期に分け（八二頁）、第三期を遣唐使の最盛期に[5]、第四期を衰微期に位置付ける[6]。遣唐使への参加者は、学問僧のみに止まらず、様々

[4] 木宮は、近代に成立する国民国家を想定して、古代東北アジア世界を中国、朝鮮、日本に分けて議論している。このあたりは本書執筆の同時代的背景が影響したか。

[5] 琉球（南島）が日本に服属したのは、第三期遣唐使時代であるという（九三頁）。

[6] 遣唐使の第四期（光仁天皇から仁明天皇までの六〇年間）は、「我が国に於ても、唐文化の摂取すべきはほぼ摂取し、やがて日本文化の萌芽が発しようとしてゐた時期である」（八四頁）。

な職業や立場の多くの人々で構成されていた（八五–八六、一一六頁）。というのも、遣唐使は「国際的儀礼の形式によって行はれた官業的貿易」であったからである（一一七–一一八頁）。もちろん当時の航海は危険であり、「恰も戦場に向ふが如く、死を覚悟せねばならなかつた」（一〇八頁）。日本への帰国に際しては、唐法を犯してでも唐物を買おうとする者もいたのである（一二〇頁）。

木宮は議論を展開するに際し、日本側の記紀を筆頭とする諸史料と、中国側の歴代正史を筆頭とする諸史料とを、単に網羅するだけでなく、日中双方の資料を突き合わせている。こうしたクロスチェックは、例えば中国側に記載があり、日本側に記載がないという現象から、日本が対中関係において対等な関係を主張したという結論を導く（一一二頁）。

また、聖徳太子や大化の改新から日本が法治国家という性格を持ち始めたという。こうした日本史上の時代区分は、一九二〇–三〇年代に流行していたのだろうか。後の『国体の本義』（東京：文部省、一九三七年）における時代区分と同一である。

第二篇第三章は、遣唐使廃絶後の日中交流を考察する。事実上の遣唐使廃絶（八三九年）から唐滅亡（九〇七年）まで日中間を往来したのは、ほとんどが唐の商船であり、担い手は唐人であった（一二二頁）。

第二篇第四章は、本書の前半における重点であろう。「我が中古における文化の多くが唐文化を摂取受容し、醇化整斉して我が固有文化に融合させたものである」（一三七頁）という一文から始まり、遣唐使によって日本へもたらされた文化を、日本がどのように受容したかを述べる。議論は、学生や学僧の名前、人数、留学期間、学習内容に始まる。さらには、彼らが日本にもたらした影響として、奈良仏教のあり方（国分寺、大仏、山岳拠点）や将来品に及ぶ。中でも、奈良の大仏が洛陽白司馬坂の大仏の模倣であるのを指摘したのは（一八二–一九〇頁）、旧著『日支交通史』発表以来の木宮のオリジナルな主張であった。こうした議論には、「我が中古の制度のうちには、我が国独得のものと思はれるやうなことも、一度唐史を検索するに及び、全く唐制の模倣であることを発見することが多い」（一七〇頁）、そして、「一体唐に於て行はれた事柄が我が国に移植せられたのは、数十年の後であることが普通である」（一七九頁）という木宮の歴史的な思考が横たわっていた。

第二篇第五章は、遣唐使によって唐文化のみならず、インド系イラン文化が日本へ移植されたと説く（二一五頁）[7]。そもそも唐王朝は漢人のみならず、西アジア、南アジア、東アジアの人間を任用し、また唐僧の中には先進地域である西域やインドへ留学する人もいた（二二八頁）[8]。唐の開放主義的文化が留学僧や帰化僧によって日本へ伝わる。著名な帰化僧には鑑真がおり、その弟子には安如宝（ソグド人、唐招提寺住職）のように西アジアや南アジアの出身者がいた（二一八–二一九、二二九頁）。また、

[7] 唐代ソグドに関する日本での研究動向は、中田美絵「日本における唐代ソグド人研究の動向」（Recent Historiography in Japan on the Sogdians in Tang Dynasty China）、『歴史学研究』九八〇号（東京：歴史学研究会、二〇一九年二月）、一七–二四頁に詳しい。

[8] 遣唐使で唐へ渡った日本人は、さらに西域やインドへ赴くことはなかったのだろうか。

後の最澄や空海の新仏教の創設は突然のことではなく、帰化唐僧や留学僧たちが日本に伝えたものが時を経て開花したのだという（二二〇頁）。なお、日本へ伝わった音楽を述べた部分では、大和にとっては東国や隼人も唐や林邑と同じく異境に位置付けられており、奈良時代の日本の内外意識が現れていると言える（二三五頁）。

総じて、本篇は日本と中国を古代東アジア世界に自律した主体とみなした上で、遣隋使や遣唐使を通じての文化変容を論じている[9]。日中間の人の移動は双方向であれども、当時の文化程度の差は大きく、文化を受容するのは日本であった。そして、中国から日本へという文化受容の一般的な傾向は、本書の扱う清代や江戸時代まで続く。

（三）第三篇「五代北宋篇」（全二章、二三七–三一七頁）。

第三篇は五代と北宋を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「五代に於ける日華交通」（二三九–二五三頁）、

第二章「北宋との通交」（二五四–三一七頁）

であり、本篇は文字数も少なく、章数も二章だけである。

本篇は、五代から北宋までを扱う。遣隋使や遣唐使のような国家間の交流と異なり、この時代の日中間の交流は貿易を目的にして、主に中国の商船が日中間を往来した。

第三篇第一章「五代における日華交通」は、「日華間の文化的交渉は左程重大なものでなかった」という（二五二頁）。とはいえ、「彼の文化的影響を受くることはなはだ少なく、寧ろ我より彼に向かって文化の輸出が行われた。勿論質に於いても量に於いても、殆どいふに足らぬほどであるが（…下略…）」（二五二–二五三頁）というように、日本から中国への文化輸出という新しい動向があった。

第三篇第二章「北宋との通交」は、北宋時代における日中間の往来を仏僧に即して述べたものである。まず木宮は、北宋と南宋に時代を区分し、両者を日華交通に関して北宋は平安貴族の鎖国主義で、南宋は武家の貿易推奨というふうに位置づける。商船の往来、特に中国から日本への来航に着目しており、北宋を論ずる本章は「日華経済交易史」というような雰囲気がある。

木宮は、奝然（ちょうねん）[10]や源信という仏僧の果たした役割に着目する。奝然が「国体の精華」[11]を日本から中国へ伝えたという（二九〇–二九三頁）。また、源信が著作を中国へ送り、彼の主張は中国でも議論された（三一三–三一七頁）。木宮は、これを「やがて独立せる日本仏教興隆の萌芽が認めらるる」と評価している（三一七頁）。

総じて、本篇は五代から北宋までの日中交流を、「彼我の文化

---

[9] 国際社会での文化触変については、国際関係論の学問領域で議論があり、例えば次の著書がある。平野健一郎『国際文化論』（東京：東京大学出版会、二〇〇〇年）、五八頁。

[10] 奝然については、数年前に関連するシンポジウムが開催された。GBS実行委員会（編集）『論集日宋交流期の東大寺：奝然上人一千年大遠忌にちなんで』〔*The Role of Tōdai-ji in the Cultural Exchange of Song China and Japan: in Commemoration of Priest Chōnen: Papers from the Great Buddha Symposium no.15*、ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集、第一五号〕（奈良：東大寺、二〇一七年）。

[11] 「國體ノ精華」は、教育勅語を容易に想起させる。

的地位はほぼ対等であった」(二五四頁)という観点で論じている。日中交流は往々にして中国が文化を発し、日本が受けるという図式を一般的に持つ。しかし、五代や北宋では日本が文化を発し、中国が受けるという現象もわずかながら登場したのだった。

(四) 第四篇「南宋・元篇」(全五章、三一九-五一九頁)

第四篇は南宋と元を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「南宋との貿易」(三二一-三三三頁)、
第二章「入宋僧・帰化宋僧と文化の移植」(三三四-四〇九頁)、
第三章「元との貿易」(四一〇-四三一頁)
第四章「帰化元僧と文化の移植」(四三二-四四三頁)
第五章「入元僧と文化の移植」(四四四-五二二頁)

である。

本篇は、南宋から元までを扱う。この時代の日中交流でも引き続き正式な国交を持たず、商船が往来する。

第四篇第一章「南宋との貿易」は、本篇前半の南宋における文化交流の背景として、日宋間の貿易を概説したものである。商船や貿易港に言及し、そして貿易の方法や品物を挙げる[12]。木宮が第三篇で予告したように、南宋は武家の貿易推奨という特徴を持つ。平安貴族が保守的であったのに対し、平清盛は武人で進取的であった[13]。

第四篇第二章「入宋僧・帰化宋僧と文化の移植」は、入宋僧の特定から遊歴地の確定を行った上で、入宋僧や帰化宋僧が日本にもたらした文化的な影響を論じている。考察は、具体的には仏教経典(特に大蔵経)、茶、思想、建築、工芸、医術に及ぶ。経典の印刷は日中両国で実施された。日本は最も中国化した仏教である禅宗を受け入れ、鎌倉幕府は鎌倉を禅宗の拠点に位置づけ、「政治の中心であると共に、また宗教上の一中心としたい」と考えたのだという。つまり、京都に対抗したのである。

本章は本篇の、さらには本書のクライマックスであろう。本章には木宮が本書序文でも述べたように、昭和一五年に中国出張で獲得した知見が大いに盛り込まれている。寺社の扁額の裏側に対してまで説明するくらいである。

第四篇第三章「元との貿易」は、従来は元寇のために日元間の往来が低調だとみなされていたのに対し、木宮は意外に頻繁であったことを強調している。特に私的な商船が多かったという。日元貿易で有名な天龍寺船は、政府(鎌倉幕府)の公認した商船であり、それは幕府が安全を保障し、商船がその見返りとして経費を支払うというものであった[14]。

---

[12] 木宮が何度か引用する加藤繁は、中国経済史を専攻し、戦前の代表的な研究者であった。木宮にとって、参考に値する中国史研究の成果だったのだろう。なお、朝鮮史家の旗田巍は第二次大戦後になって加藤を一方的に批判している。旗田巍「日本における東洋史学の伝統」、『歴史学研究』二七〇号(東京:歴史学研究会、一九六二年)、一二八-三五。

[13] 後に、宮崎市定が武家は夷狄のような存在だと言ったのに通じようか。宮崎市定『アジア史概説』(中公文庫)(東京:中央公論新社、一九八七年)、第七章。

[14] 日元間における商船の往来に言及する際、摂津住吉神社所蔵文書が登場する。時代が下り江戸時代になると、大坂-江戸、中でも大坂-尾張の航路は伊勢商人が仕切っていた。住吉神社は航海安全を祈願するから、今でいうところの旅行傷害保険の役割を担っていた。後に、尾州廻船の登場で主導権が伊勢から内海へ移り、近代商船へ変質していく。日本福祉大学知多半島総合研究所編『知多半島歴史研究の十年』(半田:日本福祉大学知多半島総合研究所、一九九八年)。

第四篇第四章「帰化元僧と文化の移植」は、元僧が日本に与えた影響を述べる。一寧は鎌倉から京都に移動し、南禅寺を開いた。従来、武家の宗教であった禅は、京都で公家にも広がるようになる（四三六頁）。正澄は叢林（規矩。禅仏教の規則）の礼法を整えた。

第四篇第五章「入元僧と文化の移植」は、日元間の往来が頻繁であったことを改めて強調した上で、元へ渡航した日本僧が日本へ持ち帰って移植した文化について言及している。将来したものには大蔵経、出版技術、禅林制度という仏教に関するものだけでなく、漢文学、儒学、諸子百家、史学、書道、絵画、茶会という中国文化全般にかかわるものもあった。本章は本書全体の一〇％を占めており、元が章題に入っているものの、第四篇の扱う南宋と元を総括した内容となっている。なお、近年の研究では、元代は中国史上、中国色を排除する時代だと位置づけられている。その元から日本が中国なるものを輸入していたというのは興味深い。日本が移入したものは果たして中国なるものだったのだろうか。

総じて、本篇は南宋から元までの日中交流を、日本と江南を往来する交易という観点から考察している。木宮はとりわけ日元貿易が、日宋貿易や日明貿易に匹敵するくらい盛んであると指摘する。また、日本の茶道にしても、京都の金閣銀閣にしても、木宮は突如出現したものとみなさない。入元僧の将来という蓄積、さらには宋以来の日中関係という蓄積を念頭に置くところに、歴史家としての木宮の研究があろう。

（五）第五篇「明・清篇」（全六章、五二一–七一九頁）

第五篇は明と清を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「足利幕府と明との通交貿易（其一）（第一期勘合貿易）」（五二三–五四七頁）、

第二章「足利幕府と明との通交貿易（其二）（第二期勘合貿易）」（五四八–六〇一頁）、

第三章「入明僧・来朝明人と文化の移植」（六〇二–六二六頁）、

第四章「明末に於ける日華の通交」（六二七–六四三頁）、

第五章「清との貿易」（六四四–六九四頁）、

第六章「来朝並びに帰化明清人と文化の移植」（六九五–七二〇頁）

である。

本篇は、明から清までを扱う。ただし、一八四〇年のアヘン戦争以降は含んでいない。この時代には、日中双方が国家間で正式な交流を再び行うことになった。

第五篇第一章「足利幕府と明との通交貿易（其一）（第一期勘合貿易）」は、日明間の交易について概説している。木宮は日明間の交易を二つの時期に分け（五三三頁）、第一章で第一期（一四〇四–一四一九年）を、第二章で第二期（一四三二–一五四七年）を扱う（五三三–五三四頁）。なお第一期に先行して、征西府と明との交渉もあり、これを第一章第一節で述べている[15]。

日明双方が交易を企てる理由は、日本は経済的利益を獲得する

[15] 遣明船に関する最新の研究成果には、村井章介（編集代表）、橋本雄（ほか編集）『日明関係史研究入門：アジアのなかの遣明船』（東京：勉誠出版、二〇一五年）が挙がる。

ためであり（五二九頁）、明は倭寇（武装した貿易組織）を取り締まるためである。日明両国は永楽条約（勘合貿易条約、制限規定）を結ぶ（五三二頁）。勘合符は貿易船と倭寇船を区別するためである（五三三頁）。勘合貿易は、第一期の方が第二期よりも幕府が主導する性格が強く、交流が積極的である（五三四–五三五頁）。特に第一期は、「外交上の儀礼によって行われた一種の官貿易と見ることが出来る」。明からは銅銭が、日本からは金や馬などがそれぞれ往き来するも、品目が一定しなかったという（五四六頁）。

第五篇第二章「足利幕府と明との通交貿易（其二）（第二期勘合貿易）」は、第一章に引き続き、日明間の交易について概説している。第二章では、第二期の様子が例えば使節の規模、航路、貿易品などの観点から説明されている。宣徳条約にて、勘合貿易は「十年一貢、人三百人、船三艘」というふうに規定したものの、十年一貢しか遵守されなかった（五六四–五六五頁）。というのも日明双方の事情があり、とりわけ日本の事情があったからである。明としては倭寇の取り締まりのために、日本の進貢を歓迎せざるを得ず、特に日本としては寺社、幕府、大名（大内、細川）による勢力争いがあったという（五六四–五六五頁）。また、応仁の乱のために、日本での航路が瀬戸内海（中国路）と四国南部（南海路）に分かれた（五五三、五七六–五七八頁）。

第五篇第三章「入明僧・来朝明人と文化の移植」は、日明双方の僧侶の往来により双方での文化の移植を説明しようと試みるものである。しかしながら、実際のところ木宮の考察は、入明僧の渡航（人名、目的（求法から文芸詩文へ）、遊歴地（江南から北京へ）、将来品（倭臭のない漢文））を跡付けるにとどまっている。もちろん跡付けるだけでも大変な作業である。また、来朝明人は著名人が少なく、そのため存在自体が知られていないようだ。

第五篇第四章「明末に於ける日華の通交」は、日華間の交易を日本のいくつかの勢力（幕府と非幕府）に基づいて解説している。日明間の交易の経路には、対馬–朝鮮という経路と、薩摩–琉球という経路があった。特に第二期勘合貿易時代に南海路が生まれてから、薩摩が交易の重要拠点になったという指摘がある（六三一頁）。木宮は薩摩の密貿易（琉球と関係あり）についても指摘している。こうした薩摩の蓄積が明治維新につながるのだろう[16]。

第五篇第五章「清との貿易」は、長崎という日本唯一の海外貿易港を中心にして、日清間の貿易を概述する。ここでの清には、中国のみならず東南アジアも含まれている（六五八頁）[17]。木宮は、まず幕府による長崎の管理や運営について述べる。続いて、清船の来往を船舶の数量で示す。そして、貿易額や入港船数の制限に話が及ぶ。制限したのは、来航増加をそのまま放置すれば、日本の金銀銅が枯渇すると幕府が判断したからである（六六〇頁）[18]。例えば、「信牌」（割符、六六五頁）なるものを使い、貿易を制限した。しかし密貿易はやまなかった。貿易が減少するのは、日本の銅の産出が次第に減ったからであるという（六六七頁）。一八世紀には海上貿易が低下する（六八五頁）。本章ではさらに、

16 薩摩や長州の密貿易については、後に宮崎市定も指摘している。宮崎市定『アジア史概説』（中公文庫）（東京：中央公論新社、一九八七年）、四三六頁。

17 広南（六五八頁）は、ベトナム南部にあった国家のことである。

18 銀の流通については、次の書籍に詳しい。豊岡康史、大橋厚子（編）『銀の流通と中国・東南アジア』（東京：山川出版社、二〇一九年）。

長崎での唐人居留、貿易法、貿易税、貿易品にも話題が続く。貿易品では、中国書（唐書）の流入が、日本の学術全般を向上させたという。

第五篇第六章「来朝並びに帰化明清人と文化の移植」は、日本に来た明清人が日本文化に与えた影響について述べている。本章は四つに分かれる。第一に、来日した明清僧を挙げる。表がある（六九五–七〇一頁）。人数は鎌倉足利時代より多く、長崎の唐三個寺（南京船の興福寺、漳州船の福済寺、福州船の崇福寺）に来て住職となる。ただし凡僧ばかりであり、「文化的には殆ど影響を与ふるところがなかった」（七〇一–七〇二頁）。唐三個寺には、船神媽祖堂があったという（七〇二頁）。ただし、一七二六年以降、渡来が止む（七〇四頁）。第二に、隠元を中心にして禅宗（臨済宗）の日本文化への移植を説く。ここで鉄眼の名前も挙がるものの（七〇五頁）、一切経の印刷について言及はない[19]。渡来僧は中国風の生活を日本でも続けた。例えば普茶料理がそれである（七〇八頁）。第三に、長崎在住の中国人とその子孫、第四に、長崎以外に在住の中国人（例えば朱舜水）とその子孫にも話題がそれぞれ及ぶ。

例えば、中国から医学が入ってきた。美術（書画）も日本へ入ってきて、池大雅や与謝蕪村を生み出す（七一六頁）。また、江戸時代の禅宗は中国語を使い、そうした風潮が荻生徂徠の漢文読解（訓読しない）に影響した（七一二頁）[20]。さらには、日本に来た中国人の中には、時にキリシタンがいたようだ（七一一頁）。要するに、本章は中国文化がどのように日本文化へ移植していったのかについて説明している。とはいえ、こうした説明は多くが中山久四郎の議論に依っているようである（七〇六頁など）。

総じて、本篇は明から清までの日中交流を、正式な国家間交流として考察している。それまでの時代と比べ、この時代は現存する資料も多いだろうから、木宮の考察はほとんどが事実関係の特定に集中している。結局のところ、近世の日中交流は、同時代の世界史の中でどのような位置にあったのか[21]。さらには、アヘン戦争以降の近代の日中交流や日中両国の展開に対し、どのような影響を与えたのか。そもそも、仏教においてどのような意義を持つのか[22]。木宮は言及しておらず、後学の課題となった。

（六）小括

ここまで『日華文化交流史』の各篇各章の概要を書いてきた。そして次の三点が判明した。第一に、本書は古代から近世までの日中交流を概観する。主に日本からの留学僧、中国からの帰化僧を主軸にした人的交流を扱う。こうした人間の往来は、単に仏僧だけにとどまらず、それぞれの時代の政治家や商人や文化人を巻き込み、まさに日中交流そのものであった。約二〇〇〇年に及ぶ

---

19 仏教経典の集大成である一切経を鉄眼が開版した。版木が宇治市の黄檗山宝蔵院（http://www.tetsugen-zakura.com）に残る。

20 荻生徂徠に中国語を教えた岡島冠山とは誰なのか。徂徠のナショナリズムと漢文読解はどのような関係にあるのだろうか。

21 中華文明はオランダやキリシタン（キリスト教）といった西洋文明とともに、日本の近世文化とどのような関係にあったのか。また、中国貿易とオランダ貿易は、鎖国と呼ばれた江戸の貿易全般の中でそれぞれどのような位置にあったのか。

22 近世日本（室町から江戸まで）の仏教学は、仏教の教理をどれほど追究したのか。小川一乗によると、近代仏教学は仏教学を大いに進展させたという。例えば、小川一乗『親鸞が出遇った釈尊：浄土思想の正意』（真宗文庫）（京都：東本願寺出版、二〇一七年）。

日中交流を考察する木宮泰彦は、たいへんな博学である。ただし、考察範囲が広いため、考察に粗密がある。例えば、宋代以降の議論は、仏教の中でも禅宗に偏っている。また、木宮が日宋関係史を特に専門としていたから、日中交流の話題が江南になる。朝鮮半島を経由する日中交流も存在したはずであるものの、そこへの言及はない。

第二に、木宮が考えるところの文化や交流というキーワードが定義されていない。文化の内容は、第四篇第二章や第五章で挙がるものなのか。本書では、一方で人間生活を政治、経済、社会、文化というようないくつかの領域に分け、そのうちの文化を指すこともあれば、いま一方で日本や中国という国家が独自に持つ特徴や雰囲気を指すこともある。

第三に、現代の学術書に備わる「序論」や「結論」がなく、本書の位置が把握しにくい。「再版に際して」（一九六五（昭和四〇）年四月付け）によると、日本において「一般に国史研究者の視野は、あまりに国内に限られ、大陸の政変や文化の動向には殆ど無関心のようである」とは言っているものの、一九六〇年代にはこうした認識は時代遅れになりつつあったのではないか。東洋史研究の蓄積も増えていたはずである。つまり、二〇世紀後半になると、学問全般の水準が挙がっていた。『日支交通史』を出版した大正末年や昭和初年とは、学問の作法も大きく変化していた。序論では先行研究を踏まえて自他の主張の差異を明示し、本論では資料や先行研究の典拠を明示しなければならなくなった。明らかなオリジナリティーが必要になったのである。『日華文化交流史』に基づく研究が、二〇世紀後半になると博士学位論文としての審査に耐えられなかった理由もここにあろう。

二、日本の学術界における意義[23]

木宮泰彦『日華文化交流史』（一九五五年）は、日本の学術においてどのような意義を持つのか。前節での内容確認を踏まえ、本節ではこの問いについて考察しよう。本節では、三つの意義を提示したい。三つの意義とは、第一に日中関係史研究におけるものであり、第二に中国現代史研究もしくは日中戦争研究におけるものであり、第三に日本近代教育史研究におけるものである。第一と第二の意義については先行研究が多いため、第三の意義が新たな研究を展開するための可能性を持とう。

（一）日中関係史研究における意義

前節で確認したように、木宮泰彦『日華文化交流史』は古代から近世までの日本と中国の交流を描く。旧著『日支交通史』（一九二六–一九二七年）を含め『日華文化交流史』は、「平板ではあるが、系統的・総括的な叙述に優れている。特に文化的交渉の記事が詳しく、（…中略…）禅僧の往来を中心とした記述には苦心の跡を見ることができる」と評価されている[24]。また、日中間

[23] この部分は、次の国際座談会での発表資料の日本語訳を改稿したものである。若松大祐「浅論木宮泰彦《日華文化交流史》在日本学術界的意義」、浙江大学歴史系、常葉大学『木宮泰彦与中日文化交流』国際学術座談会（中国杭州：浙江大学、二〇一九年三月二五日）。

[24] 田中健夫『中世対外関係史』（東京：東京大学出版会、一九七五年）、五頁。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡：静岡谷島屋、一九八五年）、一一八頁より再引用した。

を往来した僧侶や船舶を大量の一覧表で明示しているところが、好評を博してきた。つまり、『日華文化交流史』の第一の意義は、一覧表をふんだんに使用し、日中関係の歴史を系統的かつ概括的に描いたところにあると言えよう。

そもそも『日支交通史』（およびその改訂版『日華文化交流史』）は、日本史研究における対外関係史（特に日中関係史）という研究分野での成果だった。つまり、木宮は日本史研究者として研究を展開したのである。日本史に限らず、中国史（特に中日関係史）の研究成果を眺めても、類似の書籍は少ない。その理由は、『日支交通史』の対象とする範囲が広く、新しい資料や研究方法が登場して研究のレベルの向上した二〇世紀後半以降の日中両国の歴史学界では、もはや個人による執筆が困難になったからであろう。

確かに二〇世紀前半までには類似の研究も存在し、秋山謙蔵がそうした研究成果を四つに分類している。秋山謙蔵による分類を、木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』から再び引用しよう。

「明治維新以後における日支交渉史研究には四つの型がある。A．維新型、B．明治型、C．大正型、D．昭和型であり、維新型の研究代表として『外交史稿』[25]を挙げ、明治型の代表として菅沼貞風の『大日本商業史』[26]を挙げることができる。大正型の代表として木宮泰彦『日支交通史』を挙げ、さらに三浦周行の論文「元寇に関する新研究」、八代国治の論文「蒙古襲来についての研究」などを付加挙示している。」（秋山謙蔵『日支交渉史研究』東京：岩波書店、一九三九年、三〇頁）[27]

「木宮泰彦の研究は従来の諸研究を綜合し大成したもので、維新型の研究を詳細にしたものであるが、菅沼貞風の『大日本商業史』に見られるような南進の気概、国力の伸展を担うような熱意が消えている。」（秋山謙蔵『日支交渉史研究』三三頁）[28]

「さらに昭和型は（…中略…）国際情勢の深刻化を背景に（…中略…）「さらに強靭なる国民的熱意」あるものといっている。そして秋山謙蔵は自らの著書『日支交渉史研究』こそまさに昭和型の代表的なものであると擬している。」（秋山謙蔵『日支交渉史研究』三五頁）[29]

後に、川添昭二『蒙古襲来研究史論』が秋山の評価に反駁し、木宮泰彦『日支交通史』の実証性の高さを擁護している[30]。

このように、『日支交通史』が対外交流史という研究分野における重要な先行研究であったのは間違いない。とはいえ、『日支交通史』には誤読や誤解といった不充分な点がある。改訂版の『日華文化交流史』にもそういった点は残ったし、新たな誤植もある。そこで、胡錫年（訳）『日中文化交流史』[31]が重要になってこよう。

25 外務省記録局（纂修）『外交志稿』（東京：外務省記録局、一八八四年）。
26 菅沼貞風『大日本商業史：附平戸貿易史』（東京：東邦協会、一八九二年）。
27 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡：静岡谷島屋、一九八五年）、九七–九八頁。
28 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九八頁。
29 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九八頁。
30 川添昭二『蒙古襲来研究史論』（中世史選書1）（東京：雄山閣出版、一九七七年）、一〇八–一〇九頁。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九九、一二七–一三二頁より再引用した。
31 木宮泰彦（著）、胡錫年（訳）『日中文化交流史』（北京：商務印書館、一九八〇年）。

というのも、胡錫年は中国語に訳出する際に、木宮の誤読や誤解を訂正しているからである。[32]

（二）中国現代史研究における意義

木宮泰彦は主に文字資料を使いながら、時に臨地調査（フィールドワーク）に基づく知見も採用して『日華文化交流史』を書き上げた。ここでの臨地調査とは一九四〇年夏の中国出張であり、彼は一ヶ月にわたる旅行中に日記を書いており、我々は彼を通じて一九四〇年の中国の状況や日本知識人の中国認識を知ることができる。つまり、『日華文化交流史』の第二の意義は、執筆のために実施した臨地調査から、中国現代史の一コマを知り得るところにあると言えよう。

木宮泰彦は一九四〇（昭和一五）年七月二四日に静岡を出発し、当時の朝鮮、満洲、中国に遊び八月二四日に静岡へ戻った。遊歴したのは、順に京城（ソウル）、平壌、奉天（瀋陽）、旅順、北京、天津、南京、鎮江、蘇州、上海、杭州、上海である。大連と大同にも訪問を予定しながら、実施できなかった。

この一ヶ月間の日記（抄）は、『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』（一九七〇年）や『木宮泰彦：その生涯と業績』（一九九二）に収録されている。[33] ここでは、本稿の筆者である若松が興味深く感じた個所をいくつか紹介しよう。なお、引用文中の（　）内は若松による。

「午前六時半、生れて五十四歳、始めて大陸の一角に足跡を印した。」（七月二五日（木）晴、釜山）[34]

「それから李朝の忠臣を祭ったという奨忠壇公園の前で下車、高台に上ると、博文寺がある。伊藤博文公の菩提寺で曹洞宗である。」（七月二七日（土）雨、京城）[35]

「周作人氏は温厚の君子で、いろいろ話をした。夫人は静岡の水落の人で静岡へも来たことがあるという。（…中略…）揮毫を請うと（…中略…）書いて呉れた。」（八月八日（木）晴、北京）[36]

「（北京大学では、）先づ図書館を一覧し『日支交通史』が万有文庫中に翻訳されているのを知った。」（八月九日（金）曇）[37]

「（八月一三日南京では、）北支ではまづい米ばかり食ったがここで始めて日本米のような甘い飯を食った。」（八月一二日（月）晴）[38]

「支那は煙草とカバンと洋車だけは安い。」（八月一四日（水）

32 河村孝照「木宮泰彦先生著『日華文化交流史』と陝西師範大学教授胡錫年先生」、『国際経済論集』五巻一号＝通巻九号（創立一〇周年記念号）（浜松：浜松大学国際経済学部、一九九八年六月）、一八五－一九六頁。

33 「八十年の生涯木宮泰彦自伝と追憶」刊行会（編）『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』（静岡：編者、一九七〇年）、二四一－二八一頁。創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、一七三－二一〇頁。両者の収録する内容は恐らく同じであり、具体的には一九四〇年七月二五日から八月二四日までの「日記抄」である。「抄」という文字からも想像できるように、この一ヶ月間の日記の全文ではない可能性が高い。日記のオリジナルの所在が二〇二〇年現在不明である。

34 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一七三頁。

35 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一七五頁。

36 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一八七－一八八頁。

37 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一八八頁。

38 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一九六頁。

晴、南京）[39]

「（金山寺は、）広く大きな僧堂で日本の僧堂と殆ど変わるところがない。事変前は五百人も雲水がいたという。今も二百人も居るという。食堂も広い卓子腰掛で、極めて清潔、蠅も殆どいない。如何にも禅寺らしい清らかさだ。」（八月一五日（木）晴、鎮江）[40]

「蒋介石が新たに作った市政府の立派な建物の前を通った。今度の事変で大分破壊されたが今は修繕されて新政府で用いているという。それから松井路に出て左に中学校右に維新学院という支那人に日本語を教える学校の前を通り上海市に入り、陸戦隊本部の前を過ぎて四時頃宿に帰った。」（八月一七日（土）晴、上海）[41]

「実に支那人の声は高い。騒々しい。これ等も日本人とは非常に違っている。」（八月一八日（日）晴、杭州）[42]

「昔日本の留学僧が多く学んだ地だ。おお、自分にとっても憧れの地だ。」（八月一八日（日）晴、杭州）[43]

「例の如く森永製菓で昼食を食べた。高いけれども奇麗だからすきだ。（…中略…）支那映画は言葉が通ぜずよくわからぬ。兎に角日本の映画よりは七、八年は遅れている。」（八月二一日（水）晴、上海）[44]

「日本の山は樹木が生い繁っていて支那に比べると実に美しい。」（八月二三日（金）晴、長崎港）[45]

彼にとっては人生で初めての海外旅行だった。彼の旅行は多くの日本人に助けられながら続いた。登場人物の多くが「君付け」なので、彼の後輩や学生なのだろうか。また、主要な駅の駅長が日本人であるから、ここから彼の遊歴地が日本軍の占領下であったことが分かる。匪賊が出現するというような記載が散見している。彼は旅行にかかった諸経費をこまめに記録しており、こういったところにも後に学校経営者となる片鱗が表れていよう。

木宮泰彦による一九四〇年八月の中国情勢に関する記録は、他の記録（例えば東亜同文書院の『東亜同文書院大旅行誌』[46]）と比較した上で、中国現代史研究もしくは日中戦争史研究における意義が見いだせるにちがいない。

---

[39] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一九七頁。洋車とは人力車のことで、これについては八月一五日（木）の日記にも関連する言及がある。曰く、「洋車＝中支ではヤンチョとはいわず黄包車（ワンホース）という＝」云々。

[40] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』一九八頁。事変とは支那事変（北支事変）、すなわち盧溝橋事件を発端とする日中戦争を指す。

[41] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』二〇三頁。新政府とは、恐らく汪兆銘の南京国民政府を指す。一九四〇年の上海は対日協力者の政権が統治しており、三月末には中華民国維新政府から、汪兆銘の中華民国南京国民政府に変更していた。このあたりは、関智英『対日協力者の政治構想：日中戦争とその前後』（名古屋：名古屋大学出版会、二〇一九年）に詳しい。

[42] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』二〇四-二〇五頁。

[43] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』二〇五頁。木宮の杭州滞在は、八月一八日夜から八月一九日午後三時まで。

[44] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』二〇七頁。

[45] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』二〇九頁

[46] 東亜同文書院の中国調査については、「手稿叢刊」「資料選訳」「旅行報告書総目次」「旅行報告書」「旅行記録」といった単語を付して史資料が出版されている。

（三）日本近代教育史研究における意義

木宮泰彦は旧制高等学校の教授として『日支交通史』を上梓した。『日華文化交流史』の原稿も静岡高等学校教授である時に準備しながら、米軍の爆撃で灰と化した。つまり、『日華文化交流史』の第三の意義は、日本の学術における旧制高等学校の教授の研究成果を、評価する契機になるところにあると言えよう。

確かに、研究史上に名前を残す大家は多くが帝国大学や有名私立大学の教授であった。木宮は一九三〇（昭和五）年五月三〇日には天皇の静岡県行幸に際し、ご進講を行った[47]。当時の学界において高い評価を受けていた証左である。

また、最近、中国で復刊された『近代海外漢学名著叢刊』〔六五種〕（山西人民出版社、二〇一五年）は、一九四九年以降の中国で復刊されていない書籍を収録対象としたもので、このシリーズは「歴史文化与社会経済」（二三種）、「古典文献与語言文字」（二二種）、「中外交通与辺疆史」（一八種）の三つに分かれる。「中外交通与辺疆史」には、木宮泰彦『日支交通史』の中文訳[48]が収録されている。

木宮泰彦やその『日支交通史』は、旧制高等学校教授の研究成果の一事例になるだろう。先行研究を参照しながら[49]、日本の教育史や学術史の中に位置づけていきたい。

おわりに

木宮泰彦『日華文化交流史』は、単に本書が研究史上の一里塚であっただけではない。木宮泰彦は本書を執筆するために、一九四〇年の中国で臨地調査を実施した。そして、木宮泰彦はそもそも旧制高等学校の教授として『日支交通史』を書き、『日華文化交流史』に増補改訂した。彼の臨地調査や高校教授生活は、これまで注目されてこなかった。木宮泰彦『日華文化交流史』の意義は本書の成立背景にもあり、これこそが今後、研究を必要とするテーマであろう。

【参考資料】

（原書）
木宮泰彦『日支交通史』〔上、下〕東京：金刺芳流堂、一九二六－一九二七年。
木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、一九五五年。
木宮泰彦『日華文化交流史』〔再刊〕東京：冨山房、一九八七年。
（翻訳）
木宮泰彦（著）、陳捷（訳）『中日交通史』〔王雲五主編「万有文庫」第二集漢訳世界名著、七冊〕上海：商務印書館、一九三五年。
木宮泰彦（著）、胡錫年（訳）『日中文化交流史』北京：商務印書館、一九八〇年。
（先行研究）
木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』静岡：静岡谷島屋、

[47] 題目は「日支の交通路―日隋、日唐、日宋、日元、日明」であった。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡：静岡谷島屋、一九八五年）、五頁。

[48] 木宮泰彦（著）、陳捷（訳）『中日交通史』〔王雲五主編「万有文庫」第二集漢訳世界名著、七冊〕（上海：商務印書館、一九三五年）。

[49] 例えば、竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』（講談社学術文庫二〇三六）（東京：講談社、二〇一一年）。同書には参考文献（三六五－三七九頁）が多く掲載されている。

一九八五年。
創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』静岡：編者、一九九二年。
「八十年の生涯 木宮泰彦自伝と追憶」刊行会(編)『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』静岡：編者、一九七〇年。
『旧制高等学校史研究』一-二〇号（東京：旧制高等学校資料保存会、一九七四年七月-一九七九年四月）。
竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(講談社学術文庫二〇三六)東京：講談社、二〇一一年。→参考文献（三六五-三七九頁）
日外アソシエーツ株式会社（編集）『学校創立者人名事典』(*Biographical Dictionary of School Founders in Japan*)東京：日外アソシエーツ、二〇〇七年、一〇五頁。
(web)
【漫画】「木宮泰彦の奮闘」
https://www.tokoha-u.ac.jp/university/spirit/
https://www.tokoha-u.ac.jp/media/tokoha-kimiya2017.pdf